

資料

## 高齢者ケアにおけるストレングスの概念

佐久川政吉<sup>1)</sup> 大湾明美<sup>1)</sup> 宮城重二<sup>2)</sup>

### 要約

自己決定や権利擁護など、当事者主体のケアが求められている今日、強さや長所を意味する「ストレングス」の概念を整理し、高齢者ケアの実践と研究に活かしていくことは重要である。

本研究の目的は、高齢者ケアの実践と研究にストレングスを用いるために、ストレングスの概念を整理することである。

ストレングスの定義は、人間の持つポジティブな面を現わし、構成要素は、「本人」だけでなく周りの「環境」も含めて捉えていた。

実践研究において、ストレングスの概念やモデルを用いているが、操作的定義が曖昧であり、研究対象者の実態に基づいているのかについては、吟味が必要であった。

今後、ストレングスを高齢者ケアの実践に活かすためには、個人と環境の構成要素について、丁寧にアセスメントを行い、ストレングスを導くことが必要である。また、研究においては、概念を操作的に定義し、構成要素を対象の特性に合わせて焦点化して用いることが求められる。

キーワード：ストレングス 高齢者ケア 当事者

### I はじめに

高齢者ケアにおいて、当事者の強さや長所を意味する「ストレングス (strength)」<sup>1)</sup>を活かしたケアの検討が増加してきた<sup>2)3)</sup>。ストレングスは当事者が力を発揮するための支援技術として評価できるが、実践されつつ理論として整理されている段階のものである<sup>4)</sup>。自己決定や権利擁護など、当事者主体のケアが求められている今日、ストレングスの概念を整理し、高齢者ケアの実践と研究に活かしていくことは重要と考える。

そこで本稿においては、高齢者ケアの実践と研究にストレングスを用いるために、ストレングスの概念を整理することを目的とする。

### II ストレングスの概念

#### 1. 概念の背景

人々の日常生活の中で使われていたストレングスを、専門職者がケアに導入し始めたのは、1970年代後半のアメリカである<sup>5)</sup>。当時は、利用者のウィークネスをアセスメントすることで生活問題を捉え、それを解決していく視点でのアプローチが主流であった。しかし、このアプローチに対する評価として、利用者のQOL (生活の質) や地域での生活力を十分に高めることができていないことが明らかになってきた。同時に、財源の抑制に寄与する事が期待されたが、その成果が得られていないことも示された。その反省からアメリカでは、リハビリテーションモデルやストレングスモデルなどが現れ、精神障害者のケアマネジメントに活用され始めた。ストレング

スモデルは、Rappを中心としたカンザス大学が拠点となり展開し、1990年代後半まで、実践やモデル化が進められてきた。その成果として、利用者のケアマネジメントへの満足度が高まり、地域での生活力が向上し、再入院率も低下し、結果的にコスト抑制にも貢献した<sup>6)</sup>。

1992年にはSaleebeyの重度精神障害者のケアマネジメントに関する『The Strengths perspective in social work practice』<sup>7)</sup>、1998年にはRappの『The strengths model: case management with people suffering from severe and persistent mental illness』<sup>8)</sup>が出版された。日本では、1996年に小松源助『ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開』<sup>9)</sup>において、ストレングスが紹介された。

一方、高齢者ケアマネジメントに関しては、2000年にFast&Chapinによる『Strengths-Based Care Management for Older Adults』<sup>10)</sup>が出版された。その後、2005年には白澤の『ストレングスに着目したケアプランの手引き—星座理論を使って—』<sup>11)</sup>が出版され、我が国の高齢者ケアにおいて、ストレングスを活かしたケアの実践が強化され始めた。

以上のように、ストレングスモデルは、精神障害者を対象としたものから始まり、高齢者のケアマネジメントへと普及してきている<sup>12)</sup>。

#### 2. 定義と構成要素

ストレングスとは、「強さ、力」、「強み、長所」、「(精神的) な力、知力、能力、道徳心、剛気、勇気」、「抵抗力、耐久力、強度」、「頼り、支え」である<sup>13)</sup>。

語源的には、自然な世界を反映した世俗的で、日常生活の中で用いられてきた言葉で、逆境や苦難を乗り越え

1) 沖縄県立看護大学

2) 女子栄養大学

ていく力・強さに名付けられたものである。したがって、ストレングスには、科学性や専門性といった特徴はないが、人々の中で培われてきた知恵が含まれた言葉である<sup>14)</sup>。例えば、病気や障害により身体機能が低下し、日常生活上の困難さが生じたとしても、それを乗り越えていく強さがあること、それを支えているのは、人々が培ってきた知恵などの精神面での強さであると解釈することができる。そのことから、特に高齢者は、加齢や病気に伴い身体機能が衰退現象に陥りやすい反面、人生経験が豊富であり知恵や知識が蓄えられているなどの成熟現象がみられ、ストレングスを最も発揮しやすい条件にある世代だと捉えることも可能である。

ストレングスについて、これまでに以下の定義や構成要素が示されている<sup>15)~18)</sup> (表1)。

定義は、人間の持つポジティブな面を現わし、構成要素では「個人」だけでなく、周りの「環境」も含めて捉えていることである。個人の構成要素には、「願望」、「能力」、「自信」「強み」などがあり、環境の構成要素には、「資源」「社会関係」などがある。

以上のことから、ストレングスを高齢者ケアの実践に活かすためには、個人と環境の構成要素について、丁寧にアセスメントを行い、ストレングスを導くことが必要である。また、高齢者ケアの研究においては、概念を操作的に定義し、構成要素を対象の特性に合わせて焦点化して用いることが求められてくる。

### 3. 類似概念

ストレングスの類似概念として、エンパワメント (empowerment)、リカバリー (recovery)、レジリエンス (resilience) がある。これらの概念について、誕生した背景と主な定義について概観し、ストレングスとの関係について整理した。

#### 1) エンパワメント

エンパワメントは、1950年代以降の黒人解放運動の理念として生まれ、反差別・反抑圧運動や、発展途上国で抑圧された住民に対する援助において用いられるようになり、政治的・社会的な解放を目指す実践と結びつけて論じられることが多い<sup>19)</sup>。

エンパワメントとは、久木田によれば、「社会的に差別や搾取を受け、自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻すプロセス」<sup>20)</sup>を意味している。森田は、「エンパワメントとは、わたしたち一人ひとりが誰でも潜在的にもっているパワーや潜在力を再び生き生きと息吹かせることである。すべての人がもつそれぞれの内的な資源にアクセスすることである」<sup>21)</sup>と述べている。この定義は、個人のストレングスの活性化としてのエンパワメントとも読むことが出来る<sup>22)</sup>。

白澤は、「ストレングスは、エンパワメントを実現する上での一つの方法であり、条件であるといえる。エンパワメントとは、社会的に力が弱い利用者の立場に立って個々の潜在能力を引き出すことであるが、その引き出す対象がストレングスである」<sup>23)</sup>と、両者の関係を位置づけている。

#### 2) リカバリー

リカバリーは、1980年代末に当事者の生きられた体験の語りから発展し、調査研究によっても当事者がリカバリーしつつ生活していることが明らかにされてきた<sup>24)</sup>。

リカバリーとは、野中によれば、「病気や障害のために失ったものを回復する過程であり、具体的には、社会的役割、自尊心、その人の人生などである」<sup>25)</sup>とし、木村は、「自分たちが求めるのは、病気からの回復ではなく、人々の偏見、精神医療の弊害によってもたらされる障害、自己決定を奪われていること、壊された夢などが

表1 ストレングスの定義と構成要素

提唱者	定 義	構 成 要 素			
		個 人		環 境	
Rapp& Goscha <sup>15)</sup>	すべての人は目標や才能や自信を有しており、また、すべての環境には、資源や人材や機会が内在している。	願 望	能 力	自 信	資 源 社 会 機 会 関 係
Saleebey <sup>16)</sup>	ストレングスの意味を言い尽くすことはできないが、とりあえず能力、資源、強みという言葉で表現できる。	能 力	強 み		資 源
狭間 <sup>17)</sup>	異なったものが各々に有する優れたもの、それぞれがもつ、うまく生きていく力というような意味である。さらに、個人だけではなく、家族などの集団、コミュニティも保有するとされ、「資源」という意味ももつ。		強 さ	上 手 さ 豊 か さ た く ま し さ	資 源
白澤 <sup>20)</sup>	“強さ” のことで、①利用者本人や周りの環境面におけるプラス面 (強み) のこと。②かつ、それを“伸ばす”または“活かす”ことにより、利用者の自立支援につながるものであること。	願 望	能 力	好 み	外 部 の 強 さ

らの回復である」<sup>26)</sup>と述べている。

このように、リカバリーとは、病気や障害から派生する精神面や社会面を一旦喪失したことからの回復を意味していると捉えられる。リカバリーが喪失というネガティブな面からの回復に対し、ストレングスは、願望や能力という人間の持つポジティブな面を捉えようよしている。

### 3) レジリエンス

レジリエンスは、アメリカで1980年代末頃から児童虐待や心的外傷の研究において用いられるようになった概念である<sup>27)</sup>。

レジリエンスの概念をはじめに示したRutter (1985)の定義として、石井は、「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象から、深刻な状況に対する個人の抵抗力としている」<sup>28)</sup>と紹介している。三品は、「不幸な出来事やストレス、喪失などのさまざまな人生の苦難を切り抜けて生き抜き、跳ね返し、乗り切る能力やしなやかさのことである」<sup>29)</sup>とし、小塩は、「困難で脅威を与える状況にもかかわらず、うまく適応する過程や能力、結果のことである」<sup>30)</sup>と述べている。

レジリエンスは、深刻な状況などの出来事を前提として、それを乗り越える個人の力を現わしている。一方で、ストレングスには出来事などの前提はなく、本来、個人と環境に備わっている力に着目していると捉えることができる。

以上の3つの類似概念とストレングスとの関係について、藤井は、「精神障害者が望む目標に向かって、精神障害者とソーシャルワーカーがパートナーシップを形成して取り組み、精神障害者とその環境が有するレジリエンスと、それを含むストレングスを活性化するエンパワメント過程を通して、精神障害者がリカバリー過程を体験し、またアボドカシー（権利擁護）にともに取り組んで公正な社会を構築していく」<sup>31)</sup>と説明している。高齢者ケアにおいても同様な概念間の関係にあるのかについては、検討を重ねていく必要がある。

### 4. ストレングスモデルと医学モデル

ストレングスモデルを初めて提唱したRappらは、「問題より可能性を、強制ではなく選択を、病気よりむしろ健康を見るようにする」<sup>32)</sup>という考えを前提にした。その背景には、すべての人は目標や才能や自信を有し、すべての環境には、資源や人材や機会が内在していると捉える視点がある。

高齢者ケアでは、Fast&Chapinが先駆的に取り組んできた。従来、高齢者は疾病や障害により自助能力がないと考えられてきた。そのため医学モデルでは、高齢者が自力できることの強化よりも、介護者側がすべきこと、できることを重視してきた。これに対し、ストレングスモデルでは、心身の老化が進む過程における高齢者の強みの発見に重点を置く。特に、高齢者は多様な経験、性

格、役割により個人差があり、ストレングスモデルが高齢者ケアの実践に活かされるとしている<sup>33)</sup>とし、ストレングスモデルは個人、グループ、地域の強みを評価し、それを基盤とするよう調整されている<sup>34)</sup>と述べている。

このようにストレングスモデルでは、当事者である高齢者の持つ強みに加え、周りのグループや地域の強みをアセスメントし、それをケアに活かすという点において特徴がある。

高度医療が進行し、高齢者ケアにおいても細分化された技術が求められる時代になっている。一方で、高齢者の権利や自己決定が重要性され、医学モデルに沿った高齢者ケアには、限界も生じている。したがって、人間の持つポジティブな面に着目したストレングスモデルを、高齢者ケアの実践と研究に活用していくことは意義があると考えられる。

## III ストレングスの実践研究の現状と課題

### 1. 日本の現状

日本における実践研究の現状を把握するため、事例を扱った実践研究に焦点を当て、文献検索を行った。その条件は、①キーワードとして「ストレングス」が入っている、②事例を扱っている、③国内で過去15年間（1994年～2009年）に報告されているとした。文献検索には、JMEDPlusや医中誌、社会老年学データベースを使用した。その結果、抽出された文献は6件<sup>35)~40)</sup>であった(表2)。

実践研究は、高齢者ケアやソーシャルワーク、精神科看護で先行して取り組まれているが、研究としての蓄積は十分ではない。また、ストレングスの概念やモデルを用いているが、操作的定義が曖昧であり、研究対象者の実態に基づいているのかについては、吟味が必要である。

### 2. 今後の課題

ストレングスの概念や、実践と研究の現状を踏まえた上で、高齢者ケアにおける今後の課題について述べる。

狭間によれば、「ストレングス視点は、物語様式に基づいた理解の仕方である。Saleebeyは、文化的、個人的ストーリーや伝承がストレングスの宝庫であるとして、ストーリーや語りの重要性を指摘している。意味の創出の鍵は、クライアントの語りやストーリーの中にあると思われる。ストレングス視点は、そのストーリーを導き、意味を転換させ、創出する基盤となる。」<sup>41)</sup>さらに、ストレングスが導入されてきた背景には、「病理や欠陥に基づいた援助が、必ずしも当事者のQOLの向上やエンパワメントに繋がらないことが、当事者の言葉や語りから明らかになってきたことによるものと思われる」<sup>42)</sup>と述べている。以上のことから、1点目の課題として、当事者（高齢者）の言葉や語りに基づき、実証的にストレングスを導いていく実践や研究が必要であると思われる。

2点目の課題として、周囲の人たちとの支え合いの視

表2 日本におけるストレングスを用いた実践研究

表題	著者	研究目的	研究対象	掲載誌
ケアハウス入居高齢者のストレングスに関する一考察	坂上真理 <sup>35)</sup>	生活拠点の移動を経験した虚弱な高齢者が日常生活で用いるストレングスと、各ストレングスの関係をインタビューによって明らかにし、今後高齢障害者の主体性を尊重した援助を考えていくための基礎資料とする。	ケアハウス入居中の高齢者10名	北星学園大学大学院論集, 5, 45-53, 2002.
ソーシャルワークにおけるストレングススーパー変容過程の意義 — ソーシャルワーク事例の分析から —	山口真理 <sup>36)</sup>	ストレングスに着目した支援方法構築の試みとして、局面での具体的な支援展開を考察する過程研究から分析を行う。特に利用者のストレングスが支援過程の経過に伴いパワーに変容していくと理解し、それを仮にストレングススーパー変容過程と名付けた上で、既存事例の過程分析からストレングススーパー変容過程の局面展開の内容を明確にする。	知的障害児1名 母子世帯1例	ソーシャルワーク研究, 32(1), 49-57, 2006
長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助 現状認識を促す関わりから — 退院への試みを支えて —	坂上 章 <sup>37)</sup>	長期入院患者が、金銭管理への援助から退院を目指した経過を振り返り、今後の看護に役立てる。	統合失調症の50代の男性1名	日本精神科看護学会誌, 49(2), 269-272, 2006
長期入院患者の自立への第一歩 — ストレングスに焦点を当てたかわりかかわりがもたらした自己決定能力の高まり —	西垣里志 <sup>38)</sup>	長期入院患者のストレングスに焦点を当てたかわりかかわりを行い、退院支援プログラムに参加することにより変化した患者意識を、リカバリープロセスの観点から検討する。	統合失調症の50代の女性1名	日本精神科看護学会誌, 50(2), 534-538, 2007
患者の自己決定を促し、支持していくための援助 — 家族の患者理解と協働関係をめざして —	花田正之 <sup>39)</sup>	患者の自己決定を促し、支持していくための効果的な援助方法と、家族の患者理解と協働関係が、患者と家族に与える効果について評価・考察し、今後の看護に活かす。	統合失調症の40代の男性1名	日本精神科看護学会誌, 51(3), 107-111, 2008
精神科リハビリテーションにおける援助の考察 — 利用者がいきいきと生活を送れるようにストレングスモデルとICFの概念を取り入れた評価表を使用した援助の実践 —	小澤壽江 <sup>40)</sup>	利用者の希望する地域での単身生活に向けた援助と、地域で生活を経験して利用者自身が考えた単身生活の目標の変化について考察する。	統合失調症の40代の男性1名	日本精神科看護学会誌, 51(3), 209-213, 2008

点を含めて検討していくことがある。狭間は、「ストレングス視点は欧米の思想・理論からの輸入で、日本の文化の中に、定着できるかどうかはわからない。ストレングス視点も、個人の自律性、主体性の尊重の側面からのみ捉えると、個人主義的自己決定論と同様の徹を踏むかもしれない。だからこそ、支え合いという視点を組み込む必要がある」<sup>43)</sup>と述べ、支え合いの視点を取り入れることの重要性を指摘している。個人の持つストレングスが、周囲を取り巻く家族、友人・近隣、専門職者との支え合いにどのような影響を及ぼしているのか。個人のストレングスを活かして、周囲の人たちをどのようにエンパワメントしているのか。ソーシャルサポートや相互扶助体系などの視点も含めて検討していくことが必要である。

#### IV 結論

高齢者ケアの実践と研究にストレングスを用いるために、ストレングスの概念を整理した。定義は、人間の持つポジティブな面を現わし、構成要素は、「本人」だけでなく周りの「環境」も含めて捉えていた。

ストレングスを高齢者ケアの実践に活かすためには、個人と環境の構成要素について、丁寧にアセスメントを行い、ストレングスを導くことが必要である。また、研究においては、概念を操作的に定義し、構成要素を対象の特性に合わせて焦点化して用いることが求められる。

#### 文 献

- 1) 狭間香代子 (2004) : 社会福祉実践の新しい援助観 — ストレングス視点とは何か —, 更生保護, 55(10), 25.
- 2) 森田智裕 (2006) : ストレングス — 利用者のもつ本当の強さとは何か, 月刊総合ケア, 16(8), 55-57.
- 3) 小泉美佐子 (2008) : 高齢者の強さをアセスメントしてケアに生かす, 日本褥瘡学会誌, 10(2), 91-97.
- 4) 三品桂子 (2003) : ストレングス視点に基づく生活支援, 精神科臨床サービス, 3(4), 467, 20.
- 5) 白澤政和 (2006) : ストレングスモデルの考え方, 月刊ケアマネジメント, (3), 34.
- 6) 前掲書5), 35-36.
- 7) Dennis Saleebey (1992) : The Strengths perspective in social work practice, Longman, New York.
- 8) Charles Rapp (1998) : The strengths model: case management with people suffering from severe and persistent mental illness, Oxford University Press, New York.
- 9) 小松源助 (1996) : ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開, ソーシャルワーク研究, 22(1), 46-55.
- 10) Becky Fast and Rosemary Chapin : Strengths-Based Care Management for Older Adults (2000) / 青木信雄, 浅野仁 (2005) : 高齢者・ストレングス

- モデル ケアマネジメント ケアマネジャーのための研修マニュアル (初版), 筒井書房, 東京.
- 11) 白澤政和 (2005): ストレングスに着目したケアプランの手引きー星座理論を使ってー (初版), 中央法規出版, 東京.
- 12) 前掲書5), 36.
- 13) 竹林滋編 (2002): 研究社 新英和大辞典 (第6版), 研究社, 東京.
- 14) 狭間香代子 (2001): 社会福祉の援助観 ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント (初版), 筒井書房, 東京, 121-122.
- 15) Charles Rapp and Richard Goscha: The Strength Model Case Management with People with Psychiatric Disabilities (2006)/ 田中英樹 (2008): ストレングスモデル 精神障害者のためのケアスマネジメント, (第2版), 金剛出版, 59, 東京.
- 16) 前掲書14), 156-157.
- 17) 前掲書14), 135-136.
- 18) 前掲書11), 14.
- 19) 藤井達也 (2004): 精神障害者生活支援研究 生活支援モデルにおける関係性の意義 (初版), 学文社, 東京, 12.
- 20) 久木田純 (1998): エンパワメントとは何か, 久木田純・渡辺文夫, 現代のエスプリ エンパワメント, (376), 至文堂, 東京, 22.
- 21) 森田ゆり (1998): エンパワメントと人権～心の力のみなもとへ～ (初版), 解放出版社, 東京, 17-18.
- 22) 前掲書19), 12.
- 23) 前掲書11), 14.
- 24) 前掲書19), 17.
- 25) 野中猛: 分裂病からの回復支援 精神障害リハビリテーション (初版), 213, 岩崎学術出版社, 東京, 213.
- 26) 木村真理子 (2003): リカヴァリを促進する精神保健システムー専門職者と当事者のパートナーシップを求めてー, 精神保健福祉, (56), 310.
- 27) 前掲書19), 28.
- 28) 石井京子 (2009): レジリエンスの定義と研究動向, 看護研究, 42(1), 5.
- 29) 三品桂子 (2006): マネジメント場面における会話のスキルーストレングス/リリジアンモデルの実践ー, ソーシャルワーク研究, 32(3), 36.
- 30) 小塩真司 (2009): 精神的回復力, 152, 社会心理学事典, 東京.
- 31) 前掲書19), 17.
- 32) 前掲書15), 59.
- 33) 前掲書10), 19-20.
- 34) 前掲書10), 30.
- 35) 坂上真理 (2002): ケアハウス入居高齢者のストレングスに関する一考察, 北星学園大学大学院論集, 5, 45-53.
- 36) 山口真理 (2006): ソーシャルワークにおけるストレングスーパワー変容過程の意義ーソーシャルワーク事例の分析からー, ソーシャルワーク研究, 32(1), 49-57.
- 37) 坂上章 (2006): 長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助 現状認識を促す関わりからー退院への試みを支えてー, 日本精神科看護学会誌, 49(2), 269-272.
- 38) 西垣里志 (2006): 長期入院患者の自立への第一歩ーストレングスに焦点を当てたかかわりがもたらした自己決定能力の高まり日本精神科看護学会誌, 49(2), 269-272.
- 39) 花田正之 (2008): 患者の自己決定を促し、支持していくための援助ー家族の患者理解と協働関係をめざしてー, 日本精神科看護学会誌, 51(3), 107-111.
- 40) 小澤壽江 (2008): 精神科リハビリテーションにおける援助の考察ー利用者がいきいきと生活を送れるようにストレングスモデルとICFの概念を取り入れた評価表を使用した援助の実際, 日本精神科看護学会誌, 51(3), 209-213.
- 41) 前掲書14), 161.
- 42) 前掲書4), 467.
- 43) 前掲書14), 143.